

ライフデザイン学部に10年間在職させていただいて

菊池 義昭

10年前に、ライフデザイン学部が開設されるということで、その一員として参加することができたことは、私にとっては大変幸運なことでありました。小さな短期大学から、全国区の大きな組織の大学に移り、戸惑う事ばかりでしたが、皆様のご協力により10年間無事に教育と研究を並行して実施し、個人的には充実した日々を過ごすことができたことに、心より御礼と感謝を申し上げます。特に、古川孝順先生から声をかけていただき保育士養成から社会福祉士養成という新しい世界で色々な経験ができ、多くの先生方や学生の皆さんに支えられた10年間であったと理解しております。

教育環境においても、研究条件についても、これまでより数段恵まれた内容であったので、毎年発行する『ライフデザイン学研究』には必ず論文を投稿し、さらに、編集を担当している2つの研究団体の研究誌にも投稿し、内容的には密度の低いものになっても、年間3編以上の論文投稿を自分自身に義務付けてきましたが、なんとか達成することが出来ました。

私の研究テーマは、日本における社会福祉実践史を解明することであり、本誌にも岡山孤児院の実践史を含め10編の論文を投稿させていただきました。私の目指す「社会福祉実践史」は、制度史や政策史のように、政治体制が変わると中断するような非連続の歴史ではなく、当事者（生活者）の立場から各時代の制度や政策などを検証し、歴史的到達点としての評価を解明する、連続性を基本とした歴史研究を試行してきました。つまり、当事者の生き方に影響を与えた、各時代の制度や政策を含めた内容とその程度を、歴史資料から丹念に抽出して事実を確定し、その事実を再構成して実証的に分析する研究方法を実施してきました。言うまでもなく、全ての当事者の生き方は政治体制を含めた制度や政策に規定されますが、同時に先の制度や政策を含めた政治体制は本質的には生活者である当事者が多様な方法で変革してきたという歴史的な事実があり、当事者側からみると1つの政治体制は中断しても、新たな政治体制の下で当事者側は生き続けるので、中断という言葉は存在しないと理解できるからです。

そして、社会福祉という分野も、当事者への福祉実践がその中核にあるため、その歴史研究も当事者側からの歴史研究に到達することが求められ、その段階に研究が到達しないと社会福祉の歴史研究という固有の領域が確立できないとの認識を持っているからです。そのため、私が取り組んできた歴史研究では、各時代の個々の当事者一人一人への福祉実践の内容とその結果としての人生の歩みの一端に関する事実を、残された資料から抽出し、その事実を再構成して実証的に分析することを試み、そのような研究に少しでも近づくため、本誌においても、字数制限を超えるような論文を掲載させていただきました。

今回定年を迎えましたが、先のような研究を今後も続けていき、社会福祉の歴史イコール「当事者への福祉実践」の歴史に近づくように努力していきたいと考えます。ただ、残された時間は、これまでと比較にならないほど少なくなってきましたので、やれるところまで試み、どこからかそれお受け継ぐ方が出てくることを期待しつつ、続けていくつもりです。